

(61)

氏名(生年月日)	タカ 高	ムラ 村	エツ 悦	コ 子
本籍				
学位の種類	医学博士			
学位授与の番号	乙第1060号			
学位授与の日付	平成元年12月15日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)			
学位論文題目	樹枝状角膜炎の再発に関する諸要因の分析			
論文審査委員	(主査) 教授 内田 幸男 (副査) 教授 肥田野 信, 出村 博			

論文内容の要旨

目的

角膜ヘルペスは再発を繰り返す、これにより視機能が障害される疾患である。このため、予後を改善する意味を含め再発に関与する因子について詳細な検討が必要である。

一方、角膜ヘルペスの臨床経過は長期間にわたり、再発率の算定が他の単純ヘルペス感染症に比べ困難である。

そこで、今回、生命表法を用いて角膜ヘルペスの再発率を算出した。さらにこれを基準として、角膜ヘルペスの予後を左右する要因について検討した。

対象および方法

1978年から1985年の7年間に初回の樹枝状角膜炎とその発症後1年以上経過を観察し得た角膜ヘルペス症例100例100眼を対象とした。樹枝状角膜炎の再発に影響すると考えられる諸要因を、性、年齢など宿主の特徴(背景因子)、樹枝状角膜炎の範囲などの角膜所見(局所因子)、治療薬や治癒日数など(治療因子)3つに分類し、これらが再発におよぼす影響を生命表法(Kaplan-Meier法)により算出した再発率を用いて検討した。

結果

1. 対象例の再発率: 経過観察中に再発は40例40眼(40%)に認め、再発回数はこのべ77回、症例あたりの平均再発回数は1.9回であった。

2. 対象例の再発率の生存曲線: 樹枝状角膜炎発症1年後では約25%、4年経過後には50%の症例で再発を認めた。背景因子(性別、年齢別)には再発率に明

らかな差は認めなかった。局所因子のうち、実質型角膜炎ヘルペスの合併の有無についても差は認められなかったが、樹枝状角膜炎の範囲を大: 1/2~角膜全面、中: 1/4~1/2未満、小: 1/4未満の3群に分けて検討したところ、大きいものほど有意に再発率が高かった($p < 0.02$)。また、治療因子の中では樹枝状角膜炎の治癒日数が7日以上群における再発率の高値が明らかとなった($p < 0.05$)。

考察

樹枝状角膜炎の大きい症例、また防御機構がより低下している症例において再発率が高くなるものと推測した。また、樹枝状角膜炎自体の治療に対する反応性が再発に大きく影響した。

結論

今回の再発率の基準を明らかにした検討で、角膜ヘルペスの再発には、樹枝状角膜炎自体の性状ならびに治療に対する反応性が最も強く影響することがはじめて明らかにされた。すなわち、角膜ヘルペスの再発の抑制には基本病型である樹枝状角膜炎を短期間のうちに治療することが必要であることがわかり、これは角膜ヘルペスの治療に対し重要な指針となると考えた。

論文審査の要旨

樹枝状角膜炎は単純ヘルペスウイルスによる角膜炎の基本型であるが、再発を反復して重篤化する。本論文は100症例について、生命表より算出した再発率を検討し、再発に影響する背景因子、局所因子、及び治療因子を分析したものであり、学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

樹枝状角膜炎の再発に関する諸要因の分析

日本眼科紀要 第40巻 第6号

1218-1223頁 (平成元年6月28日発行)

副論文公表誌

- 1) 成人型封入体結膜炎の4例
眼臨 79 (2) : 230-223, 1985
- 2) Zoster sine herpete による眼圧上昇を伴った角膜虹彩炎の1例
眼臨 79 (8) : 1533-1536, 1985
- 3) IDU 点眼液による外眼部の副作用
眼臨 80 (2) : 194-197, 1986
- 4) 2回にわたる表層角膜移植術が奏効した膠様滴状角膜変性症の1例
眼臨 80 (5) : 848-851, 1986
- 5) 3%アシクロビル眼軟膏の副作用
あたらしい眼科 3 (11) : 1631-1634, 1986
- 6) 結膜アレルギー疾患に対するAA-673点眼液の使用経験
眼臨 81 (8) : 1850-1853, 1987
- 7) 角膜ヘルペスの視力予後
あたらしい眼科 6 (1) : 118-121, 1989
- 8) 両眼性角膜ヘルペスの臨床像
臨眼 43 (2) : 200-201, 1989